

# 乳房再建から他者へ

立教大学大学院 菅森朝子

## 1 目的

日本では、年間約9万人の女性が乳がんの告知を受けている。乳がんの治療法は、手術が第一選択である。しかし、治療のためとはいえ、乳房が変形すること・喪失することは女性たちに大きな苦痛をもたらす。近年のがん医療では患者のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）が重視されるようになり、乳がん患者のQOLを維持する方法として、乳房再建手術が位置付けられるようになった。2006年に自家組織による乳房再建手術、2013～2014年に人工乳房による乳房再建手術が保険適用の対象となり、乳がん患者にとって乳房再建手術は身近な選択肢となりつつある。

乳房再建の経験に関する先行研究では、手術前と直後の変化をとらえたものが多い。しかし、当事者においては再建して終わりではなく、「その後」がある。本報告の目的は、乳房再建の経験の過程をとらえ、乳房再建の経験が当事者に何をもたらすのかを明らかにすることである。

## 2 方法

報告者は2014年より乳がん経験者へのインタビュー調査を行っている。本報告で用いるデータは、乳房再建を経験した40代から60代の3名の語りである。2017年7～9月に東京・埼玉・大阪でインタビュー調査を行った。調査で得た語りを「乳がん診断時」「乳房再建の選択」「手術直後」「その後」にわけて分析・考察した。

## 3 結果

以下の過程が明らかになった。乳房再建という選択肢を得ることで、「悪いところは全部とって、また作ればいい」と乳がん手術に前向きに向かうことができている。中には、自分のことではなく幼い子どもへの影響を考えて決意する人もいた。乳房再建の選択時には、再建経験者に胸を見せてもらい、触らせてもらったことで具体的なイメージをもつことができ参考になった。手術後は「胸があること」に安堵し、「喪失感がなかったことがよかった」と話す。その後、3名はいずれも乳房再建の経験を伝える活動（ヌード写真集の出版、おしゃべり会の立ち上げ、患者向けイベントに出演して経験を伝えること）を行い、再建乳房と再建の経験を同病者に共有していた。

## 4 結論

先行研究では、乳房再建を機に「過去の自分」と決別して「新しい<自分>」を得た後、「完璧な乳房」「より良い<自分>」を追求する心性が生まれることが指摘されていた（川添 2017:109）。しかし、報告者が話を聞いた3名は「完璧な乳房」「より良い<自分>」を追求する方向に向かうのではなく、同病者という<他者>に出会っていた。乳がん経験者の間には、同病者の先輩・後輩関係があり、その関係が連綿と続いていることがわかった。

## 文献

川添裕子, 2017, 「乳房と美容整形」乳房文化研究会 北山晴一・山口久美子・田代眞一編『乳房の科学』, 朝倉書房.